

2007年度秋学期「学生による授業評価」アンケート実施結果報告

趣旨および目的

より質の高い教育を行うためには、直接学生の声を聞き、それを授業に反映させることが必要であるとの認識に立って、その有効な手段である「学生による授業評価」を全学的に実施する。

実施期間

2007年11月24日(土)～12月7日(金)

対象

- (1) デイタイムコース及びフレックスコースの2007年度秋学期開講の講義科目（教養科目・保健体育科目・専門教育科目）、外国語科目（日本語を含む）及び体育実技科目を対象とする。ただし、複数担任科目（オムニバス・リレー授業）は除く。
- (2) 専任教育職員及び非常勤講師を対象とする。

全体の講評

関西大学では、上記の趣旨・目的に沿い、2000年後期より「学生による授業評価」を全学的に実施している。本稿は2007年秋学期の「学生による授業評価」アンケート実施結果について報告するものである。なお、春学期と秋学期のカリキュラム構成の差から例年春学期と秋学期に大きな差がある。そのため本稿では、経年比較を行う際は、秋学期の数字と比較している。

1.実施状況

表1は、2007年度秋学期の「学生による授業評価」アンケートの実施状況をまとめたものである。この表と、実施率と回答率の経年変化（秋学期のみ）を示した図1を見ながら、2007年秋学期の「学生による授業評価」アンケートの実施状況とその経年的な変化を見てみよう。

まず、アンケートを実施したクラスの割合を表す「実施率」は、86.3%であった。2006年から3.5%微減しているものの本学において本アンケートが定着しているといえるであろう。

具体的には、「講義」での実施率は78.2%であり、2006年の実施率82.4%から4.2%下がっている。「外国語科目」の実施率は、95.5%を示しており従来どおりの高い実施率となっている。「体育実技」も2006年に比べると実施率が1.3%下がっているものの、96.5%と高い数字を維持している。また、学生の延べ人数によって算出した全体の「回答率」は39.4%であった。この数字は2006年から微減し、協力を得られた学生数が調査該当数の40%にも満たなかったことを示して

いる。

科目区分で見ると、「講義」での回答率が、「外国語科目」や「体育実技」での回答率と比べて、際立って低いことが分かる。この傾向は、図1よりアンケート開始時から一貫して見られるものである。

表2は、アンケートの実施状況を学部・コース別に示したものである。

「実施率」については、システム理工学部と環境都市工学部を除いて、どの学部も80%を超えており、高いといえよう。しかしながら、文学部以外の学部は微減しており、全体としては3.5%減少している。

「回答率」は、化学生命工学部が65%と非常に高く、次いで政策創造学部の52%、文学部の48.5%となっている。実施率同様、回答率も一部の学部を除いて微減している。

2.全体的傾向

全学の3,718のクラスについて、のべ289,410人を対象とする「学生による授業評価」アンケート結果を次の手順で分析する。

データの集約は、次の手続きに従った。共通質問数

表1 アンケート実施状況

2007年度秋学期 開講科目	対 象	科目(クラス)数 ①	講 義	外国語	体育実技	全 体
		学生数 ②	1,976	1,601	141	3,718
	実 施	科目(クラス)数 ③	231,684	52,882	4,844	289,410
		回答者数 ④	1,545	1,529	136	3,210
	実施率 ③/①		78.2%	95.5%	96.5%	86.3%
	2006年秋学期比		-4.2%	-1.3%	-1.3%	-3.5%
	回答率 ④/②		31.0%	73.4%	68.3%	39.4%
	2006年秋学期比		-0.5%	-1.6%	0.7%	-1.7%

注) 「学生数」「回答者数」は延べ人数。通年科目も含む。

表2 学部別アンケート実施率・回答率

	法	文	経	商	社	政策創造	総合情報	工	システム理工	環境都市工	化学生命工	フレックス	保健体育	計
実施率	86.8%	89.7%	91.5%	93.0%	90.9%	98.1%	80.8%	80.2%	62.5%	77.4%	91.3%	81.5%	95.3%	86.3%
2006年 秋学期比	-2.5%	1.9%	-2.3%	-1.3%	-5.1%		-1.9%	-10.1%				-1.9%	-1.3%	-3.5%
回答率	32.9%	48.5%	35.5%	36.7%	41.9%	52.0%	37.6%	36.8%	44.2%	35.3%	65.0%	38.2%	63.6%	39.4%
2006年 秋学期比	-2.4%	0.0%	-5.4%	-0.6%	2.3%		-4.2%	-4.2%				-0.9%	-2.0%	-1.7%

は12項目で、「⑤強く思う、④そう思う、③どちらとも言えない、②そう思わない、①全くそう思わない」の5件法で評定する。まず質問ごとにその項目に属する全クラスの個々の評定平均値を、0.5の値の間隔でグループ化し、8つの評価段階に分類する。次にその評価段階に対して、A+ (5.0～4.5)、A (4.5～4.0)、B (4.0～3.5)、C (3.5～3.0)、C- (3.0～2.5)、D (2.5～2.0)、E (2.0～1.5)、E- (1.5～1.0) というラベル付けを行った。なお、境界の値は上の評価段階に入れた。

図2は、質問項目ごとに、クラスの評価平均値の分布(割合)を示したものである。質問項目は、評価平均値の大きさに基づき、評価の高い項目が上の方に、評価の低い項目が下の方に並び替えられている。

図2からアンケート結果を見ていこう。一番上位にきたのは、前回と同じ「出席(10)」である。85.0%がB以上の評価であり、このアンケートの回答者の大部分がよく出席をしている学生であることがわかる。

以下、「各項目のクラスごとの評価平均の分布」の詳細を、グラフの上から下に向かって、順に見ていく。

まず「声(3)」の結果は95.1%を超えるクラスでB以上の評価であり、前回同様高い評価が得られている。これは授業で最も重要な要素であり、ごく少数のC以下の評価を0に近づける努力が引き続き必要であろう。

「要項(1)」の結果は98.5%がB以上の評価を与えており、2006年の調査結果と同じく、評価の高い項目となった。これによりほとんどの授業が教員の提示した「シラバス」どおりに進められているといえる。

「熱意(4)」は88.8%がB以上の評価を与えている。この項目がこの順位に位置することは喜ばしい結果である。

「質問(7)」はB以上の評価が約87%であるものの、B評価が37.5%と他に比べ比較的に多くなっているのが特徴である。

ついで、「教室(12)」についてはB以上の評価が、

66.8%と低い評価になっている。2007年度は教養科目の学部配当を廃止した初年度である。そのため学部を超えていくつかの科目に履修者が集中し、500名を超えるクラスサイズの授業が増えてしまった。このことに要因があるのではないかと推測される。今後はクラスサイズに制限を加えるなど、適切な教室環境を整備することが必要である。

「教科書(5)」は、87.6%がB以上の評価を与えており、前回同様高い評価といえる。教員が、教科書や配付資料を今後より適切に利用し、さらにBの評価をA以上の評価に改善することが望まれる。

「満足(8)」についてはA以上の評価が50%を超えており、2006年の数字とほぼ同じである。

「工夫(2)」については、B以上の評価は91%あり、高い評価といえる。

「知識深化(9)」も、A以上の評価が53.6%を示している。

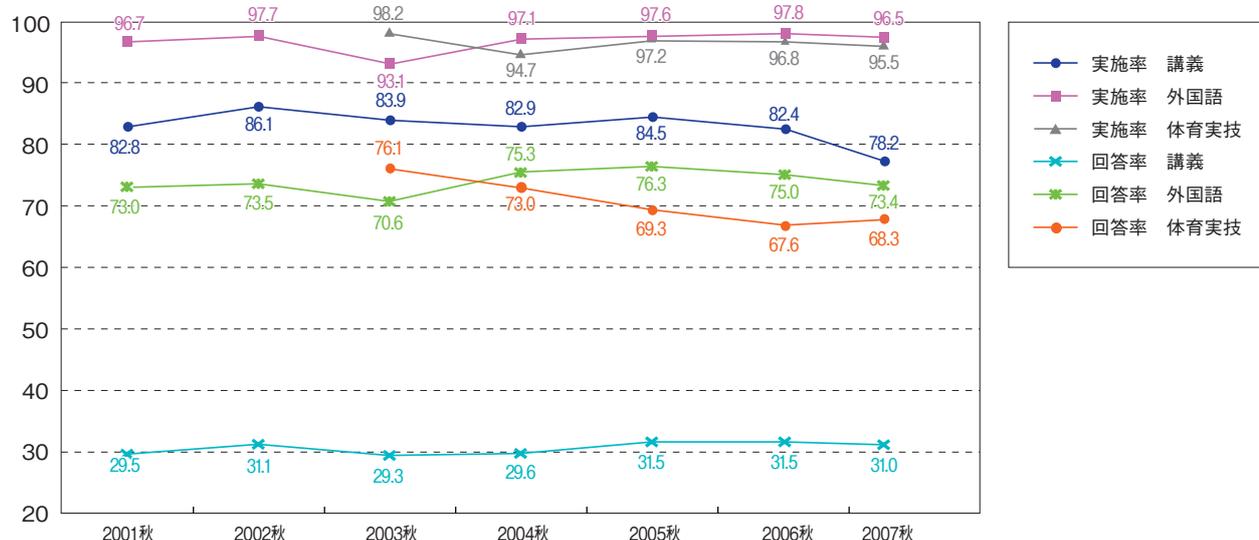
「教材提示(6)」についてもB以上の評価が90%を超え、例年以上に高い評価となっている。現在の学生は最新の機材を使った授業そのものには慣れており、授業の内容や教室環境に合わせて、映像機器機材を適切に使い分けることが、教員にますます求められている。

最後に「取り組み(11)」はB以上の評価が66%と他に比べて著しく下回っており評価の低さは顕著である。

以上の結果を総合的に考察すると、2007年のアンケート調査結果は2006年から大きな変化がないように思える。しかしながら、質問項目ごとに詳細に分析すると、教員の授業改善のための努力が多くの学生に認められているといえる。

また、東京大学が実施する全国大学生調査(2007)によると出席を重視する授業よりも提出物にコメントを付して返却するなど双方向の授業形態を取る授業の方が、学生の予習・復習時間が増えることがあきらかになっている。「取り組み(11)」の評価の低さが顕著

図1 アンケート実施率・回収率の変化(春学期のみ)



であるが、このあたりにヒントを見出せるのではないだろうか。TeachingからLearningへの転換について組織的な取組が今後必要になるだろう。

3. 学年別の授業満足度

最後に、学年別の満足度について考察しよう。表3は、「満足 (8)」の質問に対する5段階評価の回答の割合を、それぞれ学部・学年別にまとめたものである。講義には、保健体育講義科目を含み、外国語と体育実技については学部別の差がほとんど見られないため、学年別だけを示している。4年以上には、上位学年と大学院生、科目履修生などの回答が含まれる。1・2年生は、全学共通科目(教養科目)の授業が多く、

3年生以上は専門科目や免許・資格関連の科目が多いと思われるが、今回の調査ではそれらの科目によって区別をしたデータが出されていないため、この結果はあくまで学年別の全体的な傾向を示すものである。

どの学部・学年とも共通して、④の評価をした学生の割合が高いが、②と①の悪い評価をした学生は、どの学部も1・2年生で多く、上位学年にいくほど少なくなる傾向が見られる。しかし、一部の学部では、1年生より2年生のほうが多くなっている。

また、学年によって授業の満足度の割合が異なることは、教員側が受講する学生の学年に応じて授業内容や説明方法を変える必要があることを示している。

図2：各項目のクラスごとの評価平均値の分布(割合)

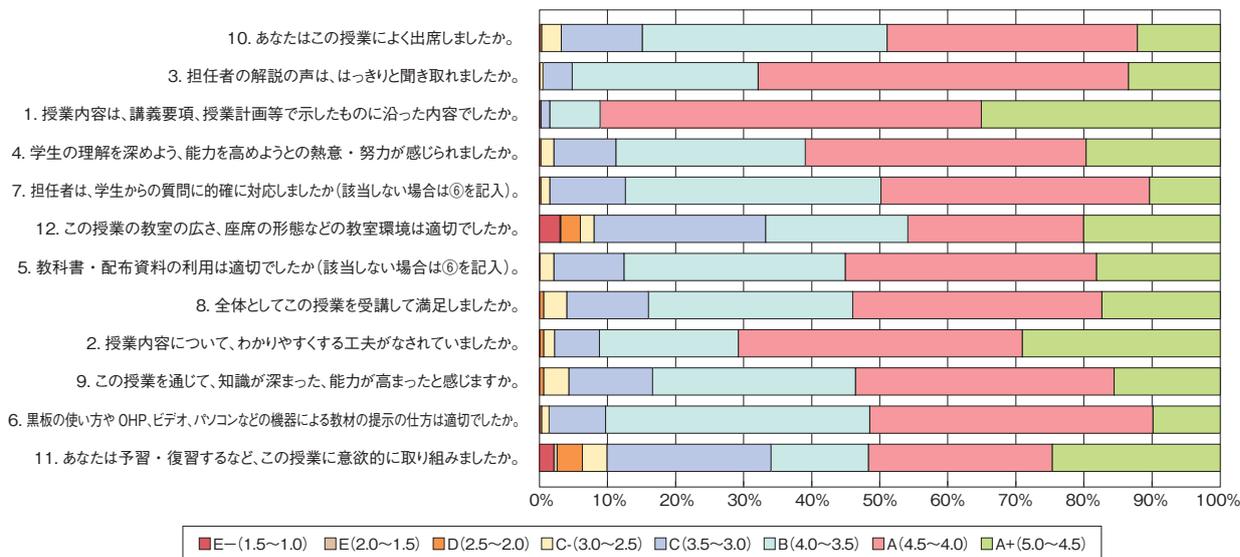


表3 授業の満足度に対する学年別の評価分布

評価	法学部				文学部				経済学部				商学部			
	1年	2年	3年	4年以上	1年	2年	3年	4年以上	1年	2年	3年	4年以上	1年	2年	3年	4年以上
5	24.7%	25.8%	28.9%	31.6%	27.2%	29.6%	28.4%	37.8%	22.8%	28.3%	27.0%	33.1%	25.6%	30.4%	31.4%	36.6%
4	37.9%	39.5%	40.9%	42.7%	39.7%	41.0%	41.2%	43.0%	38.1%	41.0%	42.4%	42.4%	37.6%	38.9%	41.1%	42.0%
3	25.5%	23.3%	22.1%	19.1%	23.0%	21.2%	22.7%	14.3%	26.9%	21.5%	22.0%	18.6%	25.4%	22.4%	20.8%	16.4%
2	7.5%	7.3%	6.0%	4.5%	7.5%	5.7%	5.4%	3.3%	7.7%	6.3%	5.8%	4.8%	8.2%	5.8%	4.5%	3.5%
1	4.4%	4.1%	2.1%	2.1%	2.6%	2.5%	2.2%	1.6%	4.5%	2.9%	2.8%	1.1%	3.2%	2.5%	2.2%	1.5%
社会学部				総合情報学部				政策創造学部				工学部				
評価	1年	2年	3年	4年以上	1年	2年	3年	4年以上	1年	2年	3年	4年以上	1年	2年	3年	4年以上
5	24.8%	26.9%	29.6%	37.7%	24.0%	26.9%	21.7%	30.0%	23.3%					19.3%	20.0%	26.6%
4	38.3%	41.4%	42.6%	43.4%	38.8%	40.3%	39.6%	39.5%	37.0%					37.9%	41.9%	43.3%
3	24.7%	22.5%	20.9%	13.9%	26.0%	23.2%	26.4%	21.1%	24.9%					30.0%	29.1%	23.4%
2	8.5%	6.9%	5.2%	3.9%	7.2%	6.1%	8.5%	7.2%	10.1%					7.9%	6.0%	4.8%
1	3.7%	2.3%	1.7%	1.1%	4.0%	3.5%	3.8%	2.2%	4.7%					4.9%	3.0%	1.9%
システム理工学部				環境都市工学部				化学生命工学部				外国語				
評価	1年	2年	3年	4年以上	1年	2年	3年	4年以上	1年	2年	3年	4年以上	1年	2年	3年	4年以上
5	22.0%				18.7%				19.7%				25.4%	27.3%	34.5%	44.5%
4	40.6%				35.6%				38.9%				41.2%	39.9%	39.9%	35.1%
3	24.4%				29.7%				27.0%				23.4%	22.6%	18.8%	15.0%
2	7.8%				9.9%				9.4%				6.9%	6.5%	4.6%	4.7%
1	5.2%				6.1%				5.0%				3.1%	3.7%	2.2%	0.7%
体育実技																
評価	1年	2年	3年	4年以上												
5	44.8%	51.0%	49.6%	43.9%												
4	37.0%	35.0%	27.1%	29.3%												
3	14.6%	11.2%	20.2%	24.4%												
2	2.7%	2.1%	1.6%	2.4%												
1	0.9%	0.7%	1.5%	0.0%												

※1 外国語および体育実技は、学年別のみ。
 ※2 学生の所属が大学院生・不明などは除く。
 ※3 政策創造学部・工学部・理工3学部で在籍しない学年のデータは削除した。